

博物学研究 その1

～いろいろな博物学資料～

川瀬 基弘

愛知みずほ大学人間科学部人間環境情報学科

1. 幅広い分野をあつかう博物学

愛知みずほ大学では、平成14年度より博物館学芸員課程が認可され博物館学芸員資格を取得するコースが開講されています。学芸員とは、資料収集・調査研究などを行う博物館の専門職員のことです。それでは博物館とはどのような施設でしょうか。文字通り“博物(学)”をあつかう施設ということですが、例えば岩波書店の広辞苑によれば、博物館とは「古今東西にわたって考古学資料・美術品・歴史的遺物その他の学術的資料をひろく蒐集・保管し、これを組織的に陳列して公衆に展覧する施設。また、その蒐集品などの調査・研究を行う機関(museum)。」と記載されています。とても端的に示されています。しかし実際には、この記載中の“その他の学術的資料”という箇所には膨大な種類の分野が含まれていませんし、博物館の業務についてもこれ以外に実に様々な仕事があります。その膨大な分野をおおまかに網羅している学問こそが「博物学」なのです。学術的資料といっても難しいものばかりではありません。玩具や雑貨なども系統的に展示されれば立派な学術的価値をもちます。

同じく広辞苑によれば、博物学とは「動植物や鉱物・地質などの自然物の記載や分類などを行った総合的な学問分野。これから独立して生物学・植物学などが生まれる前の呼称。明治期に natural history の誤訳に用いられた。中国では本草学として古くから発達。」と記されています。

一般に博物館と言うと、歴史・文化資料や自然資料を展示する施設というイメージが強いようですが、世界の博物館には様々な分野の博物館が存在します。大きく分類すれば、歴史博物館、自然博物館、民族博物館、科学館、美術館、動物園、植物園や水族館などがあげられます。

さらに愛知県を例にとりて存在する個々の博物館名を列挙すると、郷土資料室、文化財資料倉庫、歴史民俗資料室、埋蔵文化財センター、デンパーク、そうめん資料館、榎の木文化資料館、下水道科学館、

からくり展示館、明治村、リトルワールド、犬山城、オルゴール博物館、信用金庫資料館、家康館、八丁味噌の郷、三菱オートギャラリー、こども美術博物館、リサイクルプラザ、ハニワの館、道風記念館、生命の海科学館、ファンタジー館、海のシルクロード館、キリンビヤパーク、問屋記念館、アンコールミュージアム、ヨコタ博物館、県民の森、陶磁資料館、養蜂博物館、招き猫ミュージアム、かわら美術館、まつり会館、やしの実博物館、タイル博物館、ロボット館、でんきの科学館、デザインミュージアム、名古屋城天守閣、歯の博物館、産業技術記念館、市政資料館、日本独楽博物館、ゲーム博物館、明治記念館、鉄道資料館、オルゴール博物館などがあります。

上述した博物館は愛知県に実在する博物館のほんの一部に過ぎません。実際には愛知県だけで250ほどの博物館があります。もちろんこの中にはテーマパークやギャラリーのようにアミューズメント要素の強い施設もあります。愛知県だけでこれだけの種類と数がありますので日本中さらには世界中に多種多様な博物館(ミュージアム)が存在することは言うまでもありません。

ここまで述べただけでも博物館、そして博物学の取り扱う分野やその範囲がいかに莫大であるかを理解いただけたと思います。そしてこれらすべてについて詳しく紹介することは不可能です。そこで今回は、私の担当する博物館実習と選択を含めた博物館関連の自然・環境系の授業で用いる教材、さらには個人的興味で集めた収集品を博物学資料としていくつか紹介したいと思います。かなり内容的に偏りがあることを承知の上で、著者の独断で選んだ資料を写真と併せて紹介します。

2. 博物学教材の紹介

①薬用標本・漢方薬：中国で始まった本草学は、奈良時代には既に日本に伝わり、これが江戸時代に発展したものが、薬品会、物産会、本草会、博物会(以

下、代表して博物館とする)などと呼ばれていました。出品内容も様々で、薬用・食用になる天然の物産(動物、植物、岩石・鉱物など)、貝殻細工や菊人形のような作り物、人魚やカップのミイラといった希品・珍獣など、学術的なもの、見せ物見物的なものから骨董展のようなものまで実に様々でした。江戸時代に発達したこのような多様な博物館こそが、現代の博物館(ミュージアム)の始まりであると言っても過言ではないでしょう。当時の資料をもとに博物館に出品されていたと考えられる標本を図1に示しました。おもに薬用として珍重されていた動植物です。生きている動植物はもちろんのこと、竜骨と呼ばれる哺乳類や恐竜の歯や骨の化石、燕石と呼ばれる腕足類の化石など絶滅した生物も含まれています。これらの大部分は現在でも漢方薬として高価なものがほとんどです。単にながめているだけでも興味をひかれるものが沢山ありますが、これらを薬として使用するためには多くの研究がなされてきたに違いありません。動植物自体の研究に始まり、生物体を含む化学成分の薬としての効能といったように、現代の薬学の基盤と言えるでしょう。

②やきもの：図2はバラバラに壊れた陶器の破片です。これだけでは単なる不燃物でしかありませんが、これらは、すべて鎌倉時代から室町時代に生産された陶器類です。時代が古いというだけでも歴史的価値があります。さらにこれらはすべて愛知県瀬戸市で発掘された古瀬戸と呼ばれる遺物です。このように時代と出土場所が明確な陶磁器の破片は、もはやゴミではなく文化財としての価値をもちます。時には重要文化財、国宝として扱われることさえあります。例えば図2に示された資料(標本)は、それぞれ形、色や土が異なります。このような違いから、破片であっても元の形を復元することが出来ます。それが出来れば当時の人々の生活の様子まで見えてきます。やきもの(窯業)の歴史も理解できます。今日のやきものの代名詞として全国で通用する「せともの」とは愛知県瀬戸市の地名に由来します。猿投・瀬戸地区は今日の施釉陶器の発祥地として全国的に有名であり、このような歴史は図2に示したような出土物から研究が進められています。ここでは近隣の瀬戸の焼物を例に挙げましたが、焼物の歴史は長く、古いものでは縄文土器や弥生土器が有名です。全国的には伊万里、備前、唐津、萩、信楽などが知られています。本学の関連授業では、愛知県陶磁資料館、名古屋市博物館や瑞浪市陶磁資料館などの見学をしたり、古陶磁器資料を手にとって調べる実習などがあります。

③古銭：図3は時代劇に登場する小判から昭和初

期頃までの古い貨幣です。現在では使用することは出来ませんが、記念切手や記念硬貨と並んで古銭のコレクターも多く、学術的・博物学的価値が高いと言えます。もちろん単なるコレクションとしても楽しめますが、古銭を通して得られる歴史に関する情報はたくさんあります。金、銀、銅、鉄やアルミニウムなどの素材からは金属資源の産出量、藩や政府の財政力を知ることが出来ます。金属貨幣の完成度からは鑄造技術の変遷を知ることができ、流通貨幣に刻まれた文字は社会的な承認の証でもあり、偽造防止とみられる複雑な形態をとるなどの工夫がみられます。同様に古銭に描かれた人物、動植物や建造物などは当時の文化や思想までもを反映していることがあります。本学の関連授業では、写真や映像または博物館で古銭をながめるだけではなく、実物を選別・分類し、インターネットや文献資料を活用して、古銭に関する情報を収集する演習をしています。

④食玩：食玩とは、玩具付きの食品、または、お菓子、飲料などのおまけとして玩具が付いたものをいいます。10年ほど前から食玩ブームとなりコンビニエンスストアやスーパーでは食玩のコーナーが設けられていることがあります。おまけのジャンルは多様で、アニメなどのキャラクター、飛行機や戦車などの乗り物、鳥や哺乳類などの動物、歴史や神話に登場するものの模型などがあります。図4に示したカメなどの模型は、食玩として購入したものです。最近の模型(フィギュア)は非常に精巧に作られており、それぞれの分野の専門家が監修した解説書が添付されている場合があります。模型とはいえここまで精巧に作られていれば、十分に学術的な価値を持つのではないのでしょうか。もちろん博物館、動物園、資料館などで本物を観察することには及びませんが、珍しい動物などは簡単に本物を観察したり触れたりすることは困難ですし、歴史的資料など文化財級のものは入手不可能なことがあります。しかし、このようなものが模型として安価に得られますので、博物学の教材として十分に通用します。仮に模型であっても手にとって触れて見るという作業には強いインパクトがあります。このような様々な模型も関連授業において活用されています。

⑤自然科学：自然科学とは、自然に属する諸対象を取り扱い、その法則性を明らかにする学問です。一般的には、天文学、物理学、化学、地学、生物学などに分けられます。総称的な表現ですが、博物学の多くの分野をカバーしている学問です。図5は主に愛知県矢作川水系の淡水貝類の標本です。特定地域のカワニナやタニシなど淡水貝類相を解明することは、生物学の一分野であり、さらに発展させて生

態系の研究、水質環境の生物指標的研究や分類学などと幅を広げることが可能です。図6は、一見すると単なるイノシシの死骸に過ぎませんが、骨格だけでも形態学や解剖学へと発展できます。図7は、岩石や鉱物の標本です。自然に放置された状態では単なる石ころかもしれませんが、系統的に収集して調査すれば、岩石学・鉱物学など地学分野の研究に繋がります。生物学や地学に関する標本を例に挙げましたが、これらは現代の自然科学であり、博物学そのものでもあります。このような見方をする事により、身の回りに存在するあらゆる自然物(草、木、花、虫、鳥、土、水、空気など)を博物学の対象としてあつかうことができます。このような自然科学・環境に関する講義や実習授業は、本学の一般教養や人間環境情報学科のカリキュラム中に多数あります。

⑥古民具・古民芸：本学の博物館実習の講義科目は仏教美術を専門としています。しかし館務実習や見学実習では、美術館、動物園、民芸館などの幅広い分野の博物館を対象としています。引率見学の一つとして、大学に隣接する豊田市民芸館の見学およびレポート作成を毎年行っています。単に見学してレポートを作成するのではなく、事前に見学課題を充分に解説し、民芸館では手に取ることの出来ない資料を実際に手に持たせることにより、見ただけでは分からない、質感、重量感、温度感などを事前知識として理解してもらいます。この2点をすることで、見学実習の考察力を高めることが出来ます。これらを手に取ることは歴史資料・古美術品の取り扱いの練習にもなります。本学の博物館実習授業では、それらの資料の一部として、次のような古民具・古民芸品を用意しております。古民具とはひとくちでいえば昔の民衆の日常生活道具の総称です。ときには日常雑貨を含めて扱うこともあります。古民芸とは、昔の庶民の生活の中から生まれた郷土的な工芸のことで、実用性と素朴な美とが愛好されています。図8の油壺は、江戸～明治時代に女性の髪を整えるための髪油(椿油)を入れていた化粧道具です。現在のワックスの入れ物といったところです。江戸期に行灯などの灯具の燃料となる油を入れておく壺をさすこともあります。図9の行燈皿は、油皿とも呼ばれ行燈灯の下の台として置き、灯明皿から落ちる油を受けるためのものです。図10の炭火アイロンは、金属製の容器に炭火を入れ、その熱と容器の重みで布のしわをのばすアイロンのことです。今は電気アイロンの時代ですが、炭火アイロンは昭和30年頃まで使われていたようです。図11のガラスコンポートは、大正時代の脚付きの果物をもる食器です。大正

ガラスと呼ばれ、ガラス製品の歴史を知る上で貴重な資料です。図12は主に江戸時代に使われていた矢立(やたて)です。筆と墨壺を組み合わせた携帯用の筆記用具で、先端の丸い部分の蓋を開けると墨が入っており、取っ手の中には筆が入っています。図13は昭和初期に作られた土人形です。土人形の生産は江戸初期に始まり江戸末期には最盛期を迎えます。単なる飾り物や玩具としてだけではなく、厄除けの意味もあつたと言われていました。福岡県の博多人形(図14)も土人形の一種です。図15は昭和初期の掛け時計です。時計は今日では電波時計が主流になりつつあるようで、時刻の調整をする必要すらなくなりました。太陽電池や乾電池のなかった時代はゼンマイ式時計でした。更にゼンマイ式時計以前には、鎖に金属のおもりをつけてその重みで歯車を回転させていました。時刻(針の回転速度)の調節は、振子のおもりの位置を手動で調整します。図15は鎖巻きの振り子時計でミミズクの目が振子の動きに合わせて左右に動きます。ほかにも、昭和時代の凧(図16)や配置薬(図17)、江戸時代の薬研(図18)や櫛(図19)、西洋アンティークの電話(図20)など、時代を問わず様々なジャンルの古民具・古民芸に興味・関心をもたせ、豊田市民芸館の見学をより充実したものに出来るような工夫をしています。

3. おわりに

いろいろな博物学資料の一部を紹介しましたが、博物館のあつかう博物学の分野がいかに広いかということも多少なりとも理解いただければ幸いです。そしてここで紹介した資料は、数あるジャンルのほんの一部に過ぎません。博物資料は私たちの身の回りにも沢山あります。言い方を変えれば、それを博物資料とするか否かは、それを見たり手に取ったりした人自身の価値観やセンスなのかもしれません。博物資料は動植物をはじめとする自然物や古い歴史資料ばかりではありません。割り箸の包み紙を集めてみるのも良いでしょうし、ペットボトルの容器をなべてみるのも面白いかもしれません。衣食住をみわたせば、資料は無限にあふれています。それを系統的に収集して体系化できるか否かにより、学術的・博物学的資料となるか否かが決定すると言っても過言ではありません。そしてこのような能力を身につけることは、本学の博物館実習の目的の1つでもあります。

今回は私の独断で選んだ様々な博物資料を広く浅く紹介しました。次回からはジャンル別に詳しく紹介するとともに、それらの資料の学術的な面も解説したいと考えております。



図1. 薬用標本・漢方薬



図2. 古瀬戸の陶片



図3. 江戸時代から昭和時代初期頃の古銭



図4. 食玩



図5. 矢作川水系の淡水貝類



図6. イノシシの頭骨



図7. 岩石・鉱物標本



図8. 江戸時代の油壺



図9. 江戸期の行灯皿



図 10. 昭和初期の炭火アイロン



図 11. 大正時代のコンポート



図 12. 江戸時代の筆記用具



図 13. 昭和初期の土人形



図 14. 古博多人形



図 15. 鎖巻き掛け時計

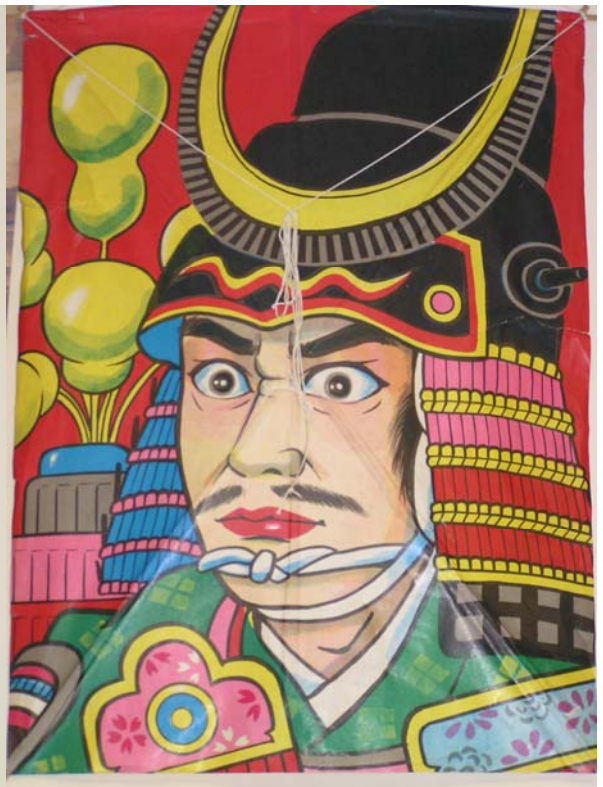


図 16. 昭和時代中期の凧



図 17. 昭和時代の配置薬



図 18. 江戸時代の薬研(やげん)



図 19. 江戸時代の櫛



図 20. 西洋アンティーク電話

